

時は静かに埋み行くとも

西松 布咏

昨年はまさにコロナに始まりコロナに終わる年になりわが美紗の会もこの現象に振り回された日々であった。

振り返ると三月十四日の季節外れの雪が舞う人形町・よし梅での「春の怒りに華添えて」はコロナが拡散し始め前日まで混乱する中での覚悟の開催となった。その後も収まる気配はなく四月初旬に稽古場を閉鎖しリモートを通しての不自由な稽古に切り替えたり、テープによる自習をしながら次の会に向けて共に励まし合う日々であった。

然し乍ら赤坂クラブでの会を二度延期し、風前の灯となるかも……と一時は諦めかけた「五十九回美紗の会のつどい」をよし梅の女将の好意で密にならぬよう可能な限りの人数で行うことができた。

そして六十回記念演奏会の会場を必死で探す私の熱意を見兼ねて？神様が手を差し伸べて下さり神田明神の「令和の間」を拝借できることになった。鬱々とした日々の中での一筋の光に浴しコロナの不安をいつとき忘れる稽古に感謝し精進を重ねた。その間、会の直前に奥様の電話で知ことになった本郷公基氏の訃報は深い哀しみであった。

七月十九日に八十五歳で家族に見守られながら静かに「思い残すことは何もない」が最後の言葉だったと伺った。京都生まれのすらりとした東男の風情

であられたが正義感の強い芯のブレない熱血漢で美紗の会四代目の会長を務めて下さった。邦楽音痴を自認しながらも日本芸術の粋を愛し常に冷静な見地で会の発展に尽くして下さいました。その真摯なお人柄は花柳千壽文師と双壁する我が美紗の会のお手本であった。そのような哀しみと末だコロナ拡散が収まらない十一月二十九日穏やかな小春日和に恵まれ神主と巫女による昇殿参拜の後「第六十回記念演奏会」を無事終えることができた。コロナ渦中でもあり集客は見込めないと覚悟の上の開催であったが、遠来のお客様や思いがけない友人たちの応援もいただき和氣藹々とした心に残る記念の佳き日となった。



そして十二月十九日の夕刻に始まったオンライン朗読スナック「雁」は、私の唄う「時は静かに埋み行く」で幕を閉じた。朗読は進藤晶子さん、山根基世さん。そして唄と三味線・西松布咏で鵜外の「雁」を不忍池を望む街から珠玉の「音」にして届けることが出来た。

私が「雁」と出会ったのは多感な高校生の時。薄幸でありながら健気に生きるお玉に惹かれ、いつかはこの物語を譲ってみたいと心の中に秘めていた。

今から三十三年前青山円形劇場で二回目的リサイタル「哀すれば唄」で藤富康子さんの作詞を基に「忍ばずの女」を創作曲として舞踊と共に念願の演奏を果した。六歳で三味線と長唄を習い始め、古いしきたりの中をもがきながらの稽古は常に自分の生き方との葛藤であったから、最愛の父のために妻の生活に生きるお玉が、東大生岡田との出会いによって自我に目覚めてゆく心の変遷を我が事のように唄に託した。「最後の言葉」忍ばずに生きたかりけり」は自分の心の叫びでもあったのだ。

爾來九年前は軽井沢・鶴間邸での前の会で俳優・寺田農さんと朗読で共演。

七年前は高輪区民ホールの幻想的な舞台「月虹染衣舞」で飯名尚人氏の演出で、舞踏・大野慶人。舞踊・花柳千壽文。ピアノ・辻準人。の各氏と映像を交えて静かな月虹のように未来に生きるお玉を描いた。

そして二〇一七年五月二十日に鵜外の寓居「鵜外荘・舞姫の間」で「虹の会」を開催した。

新婚二年目に「舞姫」を執筆したこの座敷は、鵜外の「余八石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」の遺言書が壁にかかっている。最後に鵜外を登場させ「忍ばずの女・忍ぶ男」と題し岡田と鵜外の二役を宮尾昌弘さんが演じた。そしてこの年末に図らずも我が美紗の会の福岡俊弘氏企画による「雁」の才

■たより第6号

発行者 美紗の会
編集責任者 照沼太佳子
デザイン 近藤幹則

■美紗の会

主宰 西松布咏

稽古場 港区白金台三・二・二

白金台プレイス三階

電話 (三三四一) 二七二六

(五四四七) 二四一一

E-mail : mfue@soleil.ocn.ne.jp

URL:<http://www.misanokai.com/>

